

滋味を感じる歌 屋良健一郎

く

・ ランドセルにすすきを差してゆうぐれのいすこより子は帰りきたるか

松村正直『風のおとうと』は一九七〇年生の作者による第四歌集。二〇一一年から二〇一四年までの四〇代前半の作を収める。

・ 丼のあたたかき具のうえに載るうずらの卵は昭和のこころ

・ 食パンの白きが二枚浮いており龍神さまと呼ばれる池に

・ 注がれてシャンパンタワーは満ちてゆく春の明るき棚田のように

に

中華丼のうずらの卵、そのありのままの素朴な姿はなんだかノスタルジックだ。いつかはその名も忘れ去られてしまうかもしれない龍神池の静けさ、いずれ無くなるかもしれない棚田の風景のまぶしさ。それらの懐かしさが優しく心に響く。

・ ゆうぐれはドアにドアノブあることのこんなにもなつかしくて触れたり

・ 人形をあきなう店があると知りてよりここに階段があるドアにはドアノブがあり、地下がある建物には地下へ続く階段がある。何気ない日常の中で、その「当たり前」に立ち止まる。世界を知覚することで詩情が生まれる。

・ つながれて自転車は樹の下にあり辺りの草を食むこともなく・ カウンターあればすなわち制服の人と私服の人とを隔つ・ 午前中に仕事終えたる豆腐屋が水とひかりを片付けており・ やわらかなあらがいののち包丁を受け入れてゆく肉のだんりよ

自転車は動物ではないから草は食べない。カウンターの彼方と此方では立場が異なる。豆腐屋は豆腐を売り、肉は切られて調理される。子は小学生らしい時間を過ごす。それぞれがそれぞれの「当たり前」を、自らの役割を生きている世界。それを見つめる視線がどこか淋しげでもあり、深みを感じさせる。

そういうえば、第五歌集『ふどうのことば』を出した大松達知も同じく一九七〇年生、四〇代である。

・ 十二時に寝るぞと決めて十二時に合ふやうに注ぐ二センチの酒

・ 朝凧の葉山の海が見たくなり途中で降りて欠勤、しない

・ 十代の心の洞はそのこころ大きく響かせるためにある

「十二時に寝る」というルールの範囲内で酒を楽しむ男は、海が見たくてもいつも通り仕事を行く。一首目の「」が空想を一気に破り、私達を現実世界に引き戻す。教師である作者は生徒の「十代」の時間を尊重して見つめる。松村同様、世界の中で個々が生きている時間、それぞれが果たしている役割に自覺的だ。

・ きのふより一升瓶が軽くありいちにち生きてありがたき夜

・ 妻の機嫌、娘の機嫌とりましてわれの機嫌は「白霧島」がとる

・ ゆつたりと日向国に抱かれゐるよろこびありぬ焼酎のめば外で働き、家庭内では夫、父として妻子の機嫌をとる。そういう桿組みの決まつた世界の中、酒と向き合う時間に喜びを見出す。

豊潤な酒の時間は若い人の歌にはなかなか出てこないだろう。この二人の四〇代歌人の作に、滋味を感じるのである。